

和牛繁殖農家の今

食卓の彩りに欠かせない牛肉。「最近高くなって、食べたいけどなかなか買えない」という人も多いのではないのでしょうか。ここ数年、和牛の値上がりが続いています。その背景には、和牛繁殖農家の減少がありました。そこで、今回は伯耆町末鎌で子牛繁殖業を営む木嶋さんを訪ね、生産現場の生の声を聞いてきました。

牛肉値上がり 3年前の1.5倍に

今、全国的に牛肉の値上がりが続いています。全国平均小売価格の移り変わりをみると、肩肉100グラムが3年前は400円台だったのに対し、今年は600円台まで上がっています（農畜産業振興機構調べ、価格は税込み）。

繁殖農家減少で子牛取引価格が急騰

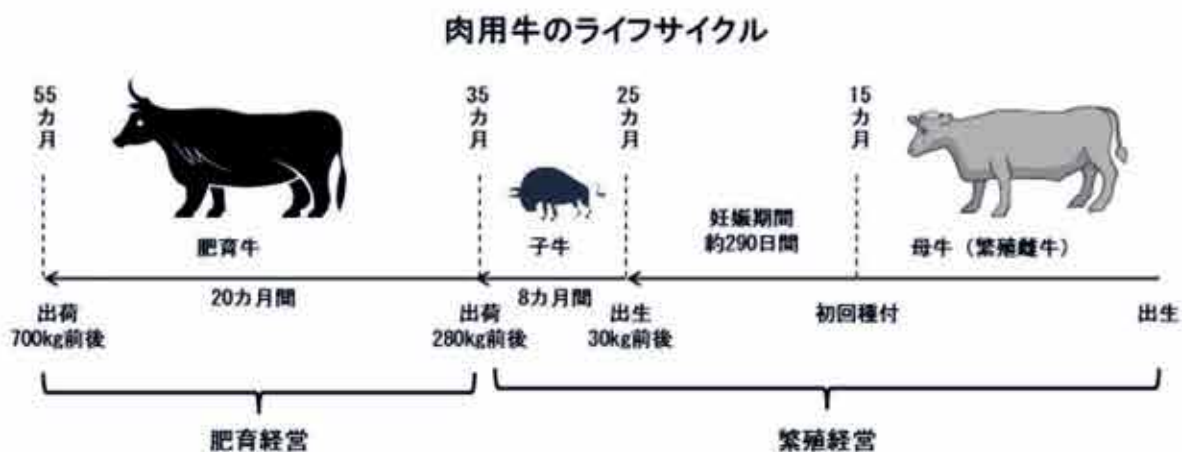
その背景にあるのは、子牛繁殖農家の減少です。平成22年に宮崎県で発生した口蹄疫^{こうていえき}、その翌年に発生した東日本大震災により、繁殖農家の多い東北・九州地方で、繁殖農家の離農が一気に進みました。また、高齢化・後継者不足のため、多くの繁殖農家が廃業しています。

繁殖農家が減ったことで、取引される子牛の頭数が減少。その結果、子牛の市場価格は急騰し、店頭に並ぶ和牛の販売価格にも影響が出ているのです。

農家から食卓に届くまで約5年

肉用牛経営は、子牛を生産する「繁殖農家」と、その子牛を育てて肉を出荷する「肥育農家」に分けられます。繁殖農家の主な仕事は、母牛に子牛を産ませ、その子牛を育てることです。

産まれた子牛は、約8〜10か月間、280kg前後になるまで育てられ、家畜市場へ出荷されます。



出典：(独)農畜産業振興機構「肉用牛繁殖経営と新規参入者への支援について」(http://www.alic.go.jp/koho/kikaku03_000355.html)



市場に出された子牛は、肥育農家が買い取り、約20か月間、700kg前後まで育てられ、食肉市場に出荷されます（図参照）。母牛の出生から計算すると、私たちの食卓に牛肉が届くまで、なんと約5年もの歳月を要するのです。

伯耆町は和牛農家を応援しています

和牛の生産は、息の長い事業です。子牛の取引価格が上がっているからといって、2年後もそうであるとは限りません。そのため、生産を増やすための投資になかなか踏み切れない、というのが現状です。

そこで、伯耆町は県や農協などと協力しながら、生産農家に対してさまざまな支援を行っています。

例えば、新規就農、優良な母牛の購入、町内産子牛の購入、鳥取和牛オレイン55に認定された枝肉を出荷した場合などに、それぞれ補助金を交付して、生産者の経営安定や町内和牛の質的向上を図っています。

これにより、伯耆町の和牛経営が、子牛生産から牛肉出荷まで、町内で一貫してできれば、と考えています。

伯耆町が、安心して高品質な和牛を生産する「牛どころ」として定着し、和牛のブランド地となるよう、和牛農家を応援します。

問い合わせ先

産業課
TEL 085916210723



「伯耆町の和牛はいい牛だ」と言つて くれる人を増やしたい―繁殖農家・木嶋泰洋さん―

伯耆町末謙の尋牛牧舎で繁殖農家を営む木嶋泰洋さん(62)。妻・真理子さんとともに、5棟の牛舎で雌牛50頭、子牛40頭を飼育しています。

木嶋家は、祖父の代から三代続く繁殖農家。父親から本格的に経営を任された昭和57年から、和牛一筋34年。「好きなことは日曜日でもやるでしょう。だから、私にとっては毎日が日曜日です。仕事が面白くて、年をとるヒマがない」と語る泰洋さん。一頭一頭、丁寧にブラシをかける姿からも、この仕事と牛たちに対する深い愛情が伝わってきます。

木嶋さんは、ご夫婦ともに獣医師でもあり、牛の診療やお産の介助なども引き受ける、地域のリーダー的存在です。木嶋さんに勧められて和牛飼育を始めたという方も少なくありません。



繁殖農家が減っている現状について、「牛がいなくなると、先祖が耕し守ってきた土地は荒れ、生まれ育った愛着ある風景もなくなってしまう」と危惧しながらも、「大きな儲けはないし、多額の初期投資が必要なので、なかなか簡単にやれとは言えないが、

最近経営を始めた若い農家もいる。始めたばかりの若い世代がうまく軌道に乗れるように、できる限りのサポートをしたい」と、話しました。

最後に、今後の目標を伺いました。「最近は、サシの多さなど見た目の美しさにこだわり、和牛本来の価値とも言える味の追求が後回しになっている。えさの配分を変えたりなど試行錯誤した時期もあったが、一人の力では限界があった。そんな時、鳥取県の畜産試験場に旨味研究のできる設備が導入された。行政の支援のおかげで、今では、おいしい和牛の開発が県内全域に広がっている。恩返しのためにも、全共(※)でよい成績を残し、伯耆町の和牛はいい牛だと言ってくれる人を増やしたい」。

自身だけでなく、地域や若手農家といった広い視野で和牛づくりの未来を見つめる泰洋さん。今回の取材を通して、泰洋さんのような方たちのものづくりへの真摯な取組が、町の産業を支えているのだと、改めて感じました。

※全国和牛能力共進会の通称。5年に一度、全国の優秀な和牛が集められ、改良の成果やその優秀性を競う全国大会。「和牛のオリンピック」とも呼ばれる。